

日本の忍者

ライター：三浦元吾、Jonathan Wong

エディター：鈴木丈治

現在から遡ること約 900 年。平安時代頃に登場し、独特な身のこなしと忍術で主に諜報活動などの任務で活躍した人々、それが忍者だ。特別に訓練され、時には超人的な技などを繰り出すこともあったとされる忍者の姿をイメージする時、私たちは忍者に対してどこか非現実的な印象をもつことが多いかもしれない。しかし、現代においても忍者と同様の稽古を受け、修行に励み、技術に磨きをかけている人たちが実在するのだ。

1970 年代に創設されて以来、40 年近くそのような忍術の稽古がおこなわれているのが、武神館道場だ。武神館道場は、日本だけでなく、アメリカやフランスといった海外の国にも支部を持ち、ファンのあいだでは世界的に有名な忍術道場である。ただ、創設当初は国内外ともにそれほど知名度が高かったわけではない。それが、武神館道場の創始者である初見良昭氏から稽古を受けるために来日していたアメリカ人の門下生が帰国した際、アメリカの雑誌に初見氏のことを紹介したことで世界中の人々から認知されるようになったのだそうだ。門下生の多くは、子供時代に見た忍者アニメや漫画に憧れを持って入門するのだという。道場でどのような稽古が行われているのかというと、忍者が実際に使用していた薙刀という長さ 2 メートルほどの武器や木刀などの扱い方や、古くから代々受け継がれてきた忍術を指導するなど様々だ。力が強くない女性のための護身術なども取り入れており、現代に適応した内容となっているのがよくわかる。

「相手に応じて技が変化するというのが忍法の考え方なので、常に新しいんですよ。」こう語るのは、武神館道場青山支部の道場長である中太啓治氏(51)だ。中太氏は 19 歳の時に武神館道場に入門して以来欠かすことなく稽古に励み、今から 10 年ほど前に、最高段位に到達した忍術の達人だ。伝統的な「型」を基礎としたうえで、相手の動きに合わせて応用するため、相手がどのような技を繰り出してきても臨機応変に対応することができるという。型に捉われないのが忍者の特徴だ。

忍術の稽古に励むことで、肉体的な面だけではなく、精神面も共に鍛えられる。これは、日常生活においても生きてくる。他者に対して余裕をもち、穏やかに接することができるようになるのだ。実際、以前よりも怒ることが少なくなった、肉体的にも精神的にも自分を成長させられた、と語る門下生も少なくないという。このような肉体と精神の調和は最も重要な忍者の精神でもあるそうだ。

武神館道場では、老若男女、国籍を問わず様々な人たちが稽古を受けている。外国人の門下生のなかには、自国の道場で修行を積んでから日本に稽古を受けに来る人や、日本で修行を積み、帰国して自らの道場を開く人もいるという。しかし、海外のファンから絶大な人気を誇っているのに比べ、日本国内ではそれほど知名度が上がっていないのも現状だ。忍者という日本古来の伝統を日本の若い人に継承していきたいと考える中太氏はこう語る。

「日本の伝統的なものも知ったうえで、時代の流れに沿って新しいものを取り入れていってほしい。」